The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	言語音の機能的生成 : あるいは、言葉が裂開するとき
Author(s)	菅野, 盾樹; 近藤, 和敬
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2007, 33, p. 39-77
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9480
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

言語音の機能的生成

―あるいは、言葉が裂開するとき―

菅　野　盾　樹・近　藤　和　敬

目　次

1.　言語の存在論という問い
2.　第一回目の言語音
3.　知覚から言語へ：再帰的動き
4.　共鳴する身体と自己聴取
5.　数学の生成論
6.　理念化（カテゴリー化・投射）
7.　二対の構成的動きと記号の身体
8.　三層構造としての言語音
9.　模倣の仕草としての言語音
10.　言語による世界制作
11.　習慣とシンボル機能

言語音の機能的生成
―あるいは、言葉が裂開するとき―

菅野盾樹・近藤和敬

1　言語の存在論という問い

母親の胸にだかれたゆうちゃん（生後九ヶ月）は、あぁと感嘆の声をあげながら指さしをしたという。文字通り初発のこの<指さし>の記号機能がどのような構造をそなえているか、また身体性の転調（メルロ=ポンティ）として、この指さしの機能がいかにして創発されたのか――こうした問題についてはすでにひととおりの観察を施した[1)]。

幼子があげたその声が感嘆の表情価に充ちているのは、これを疑うことができない。ゆうちゃんの指さしと発声とは全体として感嘆の表出をなしており――ぎこちない言い方になるが――ひとつの表情的所作なのである[2)]。この音声は文法書の品詞分類にいうところの「感嘆詞」にあたるのではないか、とわれわれは思いたくなる。

ところがソシュールをひとつの源泉とした正統的言語学の考え方だと、言語要素であるかぎり「感嘆詞」にも恣意性が認められるし――例えば、フランス語の aïe! に対応するドイツ語は au!である――感嘆詞の多くが一定の語句が縮約されたものであること――例えば、「チクショウ！」――などを理由として、言語音の生成に関して感嘆詞が投げかける問いかけと暗示を捨てて顧みない[3)]。ゆうちゃんが遂行した<あぁ>のパフォーマンスは言語音などではなくて、赤面が恥ずかしさの表出でありその徴候であるのと同じように、感嘆の徴候ではあっても感嘆を意味する「詞」ではないとされてしまう[4)]。

日本語版『一般言語学講義』で「感嘆詞」と訳された語はじつは原典では exclamations となっている。これは「人間があげる感情のこもった叫びないし音声」を意味する語であって、必ずしも言語要素だけをいうわけではない。とするならば、ソシュールは日常用語を術語に作り変えて使用したといいうるのではないだろうか。翻訳者のやり方はむしろ適切だったと評しうるだろう。いずれにせよ、訳語が「感嘆詞」に定められたことが、かえって正統的言語学の思想に不備ないし不徹底があったのではないかという疑いを抱かせる[5)]。

もちろん、正統的言語学は、言語音にともなう音声の質的側面（ピッチ、イントネーション、ストレスなど）が音の属性（sound attributes）であることを否定する

ものではない。しかしそれらは、言語の意味機能に寄与しないという意味で単に副次的な（para）言語的属性すなわち「付加属性」――これも原語は sound attributes であるがこの訳に変えられている――であって、（言語学とは別の言語学的部門としての）パラ言語学（paralinguistics）が考究すべき主題にすぎないとされるのである。

ゆうちゃんの嘆声が言語音ではない、という断定は正しいのだろうか。この疑いを晴らすためには、<言語の存在構造の問い>――そもそも言語音とは何をいうのか、あるいは言語音はどのような構造をそなえるべきなのか――を明らかにしなくてはならない。言語と言語音とはもちろん同一ではない。だが人には、言語が音声を口にする身体行動である――あるいは、言語は音声であるという紛れもない事実を、やすやすと忘れてしまう傾きがある。もちろん言語が音声に過ぎないとはいえない。にもかかわらず、言語とはまずもって音声でありかつどこまでもそうであり続けることを誰が疑えるだろうか[6)]。

<言語の存在構造の問い>を不用意に引き受けるのは厳に慎むべきである。なぜなら、言語の構造を分析することと軌を一にして、正統的言語学の種々の前提を知らずに背負わされるかもしれないからである。むしろわれわれは、言語がすでに使用されている世界から一端は立ち去らなくてはならない。その上で改めて<言語>と呼ばれる存在者があることを始める（comes to be）――人間の非言語的な発声が<言語音>へと生成する――その一部始終を明らかに見ようと努めなくてはならない。われわれは<言語音の生成の問い>の解明にあたることによって、正統的言語学の哲学的前提を離れて新たに言語の存在論を闡明することを期しているのである。

2　第一回目の言語音

指さしという記号論的身ぶりをなしうるようになった幼児は、ほぼ同時期に言語音を口にできるようになることが観察されている。それが本物の<言語音>かどうかは個々の事例を吟味しなくては判定できないにしても、ともかく大人達は幼児の言語的発達についてそうした観察を確かなものとして提示している。

われわれの考察はこの地点からスタートする。幼児が生後数ヶ月ではじめる<喃語>や言語とは称しえない種々の<音声模倣>のことをここで採りあげるつもりはない。重ねて言うと、われわれにとっては、最初の意味ある言語音が沈黙のさなかから立ち上がるその刹那が問題なのである。

さて、よちよち歩きを始めたばかりのおさむ君を公園で遊ばせたときのことである。木々からいっせいに鳩の群れが公園に舞い降りてくる。そしてそこら中を――首を突き出し突き出し、紅い足を振り上げ振り上げして――歩きまわる。おさむ君は鳩の群れを認めるやいやなすぐさま手を鳩の群れの方向にあげ、そちらへと歩き出す。片方ではなく両方の手があがっている。しかし平行にあげられているわけで

はない。<指さし>の典型的形態が出現してはいないが、確かに人差し指は伸ばされており、どれかの鳩に触ろうと手を伸ばしている風にも捉まえようとしている風にも見える。そのとき大人は聴いたのである、おさむ君が /ポッポ/ という音声を口にするのを [7]。

ここでいったいどのような記号過程が起こっているのだろうか。まず初めにこの表記に関連して留意すべきことがいくつかある。第一に、これは正統的言語学が分節音を表記するときのやり方に倣ったものだ、ということである。われわれはいわば咄嗟の判断としてこの表記を採用したまでである。それというのも、おさむ君が生涯で初めて言語音をいまこの公園で口にしたという想定を明確に打ちだしたいからである。

しかし第二に、このように記述された言語音が実際に/ポッポ/なのかどうか、という問いだては依然として有意義である。この問いが正統的言語学にとってスキャンダルであることを看過してはならない。この点は言語の存在様態の問題にかかわると同時に、その様態のゆえに言語の形式性に内属するある種の攪乱要因にもかかわりがある。

最初の点について言うと、その音が言語の音であるかぎり、それの有り様は純然たる私的なものでもなければ、反対に、純粋に客観的なものでもない。おさむ君が構音と調音のプロセスを介して生成した音声であるかぎりで、この/ポッポ/は<対自態>（le pour soi）――この自己が身体性の自己であるということがわれわれの論点であるのだが――であるが、まずもっておさむ君本人が聴取し、と同時にその場に居合わせた大人が聴取することなしには<言語音>ではありえないという意味で、ただちに<対他態>（le pour autrui）――つまり自己に対するもう一つの自己という意味での<他者>の聴取に委ねられるもの――でもある。議論を先取りすることになるが、言語のこうした存在様態はこれを<相互身体性>（intercorporalité）と呼ぶことが適切であると思える。もちろんここにいう<同時性>は経験的な時間関係のことではない。

ところで、言語の形式性には本来的なゆらぎの要因が含まれている。ソシュール言語学は、よく知られているように、<パロール>と<ラング>を峻別し言語学の対象が後者にしかないことを主張した。ソシュールが<ラング>を共時態における純然たる形式的体系として設定できると信じたのは、それを<パロール>から切断できると考えたからである。しかしながら、この二つの処置が可能であるという主張は臆断にすぎない。すなわちこうした<分離>（segregation）は原理的に不可能である。少し単純な言い方かもしれないが、<パロール>の個人性や偶然性と見なされたものは言語の質料として<ラング>の構成要素であり続けるのだ。このかぎりにおいて<ラング>は純粋な形式性ではありえない。そうでなければ、語彙の意味変化（semantic change）や音韻変化（phonetic change）、あるいは文法化（grammaticalization）などの言語現象が説明できなくなるだろう。

これに対して、いやそうではない、ソシュール言語学の枠組みでも、言語の<歴史的変化>に言及できる、と反論されるかもしれない。しかし、実際に行なわれているのは、ある形式的体系から別の体系への対応づけであり、この操作を重ねることによる連続的変換の記述であるにすぎない。つまり<変化>という時間性そのものには一指も触れることができないのである。

おさむ君が口にした /ポッポ/ という分節音には、もしかすれば分節音として他の形式性をそなえたかもしれず、いつかまた他の形式性をとるかもしれない、という潜在性がつねにともなっている。この潜在性は、後で見るように主として言語音を統合的に構成する他の部面――プロソディーと非音声的身体運動――に根ざしているだろう。この事態を直視するとき、言語音の表記法に工夫をこらす必要があるとおもえる。具体的にどうすべきかについては後で述べたい。

3　知覚から言語へ：再帰的動き

ふたたび、おさむ君が公園で鳩の群れに出会うことによって火蓋を切られ、問題の言語音を口にすることでクライマックスに達する、一連の知覚と運動の系列に立ち戻りたい。

公園に舞い降りた鳩の知覚をおさむ君は初めて構成したのであった。言い換えるなら、彼はそれ以前には見たことがなかったハト科の鳥（columba livia）をこのとき初めて見たことになる。<対象を見る>とは<対象を何かであるものとして（as something）見る>ということにほかならない。この働きは言語の営みではない以上文字通りの意味で<何かがどのようであるかを記述すること>つまり<述語づけ>（predication）ではありえないが、とはいえ何かを視覚によって捉えることが、未分化で一瞬のうちに与えられる感性的衝撃のようなものではないこともまた明らかである。

このようにして、言語が生成する以前の経験としての知覚に認められるのはいわば<黙した述語づけ>（tacit predication）であり<述語以前的なカテゴリー把握>（pre-predicative categorization）にほかならない[8)]。

おさむ君がこの種の鳥類を<知覚項>（le perçu; the perceived）として経験するためには、少なくとも二つの要因があずかっている。一つは、知覚項を構成するための素材が必要となる。おさむ君の事例でいうなら、この子は鳩の知覚と関連する何らかの知覚的素材をあらかじめ所持していなくてはならない。

かつて知覚を科学理論のモデルにもとづいて説明することがおこなわれていた。ものを知覚することは、それについて科学理論を制作することに匹敵するというのである。この見地によると、まず外界から感覚器官に対して、認知的価値が微塵もない<感覚>や<刺激>などと称されるもの――<記号>という存在性格を有しないも

の――が与えられ、次いでこの所与を中枢神経系において知的に処理する――これらの二つの段階をへることで知覚が成立するのだという（知覚の二段階構成説）。

この種のモデルは、感覚に由来するデータが――理論の媒介なしに自ずと正当化されるという意味で――<基礎的>であるというドグマに依拠していた。しかし、一方では<感覚>なるものの現象学からの批判、そして古くはゲシュタルト心理学と近くは認知心理学による知覚研究と、他方では科学理論に関する分析哲学からの集中的討議（そこには、科学的説明、所与の神話、基礎づけ主義、データの理論負荷性などの主題が含まれていた）を通じて、この教義（基礎づけ主義; foundationalism）は信憑性を失うにいたっている[9)]。反基礎づけ主義に与するわれわれにとって、われわれが脚を踏まえるべき基盤としては、理路のおもむくところ<記号主義>しかないしそれで十分であるように思われる。すなわち、認識と思考の対象となるあらゆる存在者が記号という存在性格を有するという見地のことである[10)]。

さて記号主義がひらくパースペクティヴのうちに立ちつつ考察を続けるとき、知覚の営みはその場にどのようなものとして立ち現れるだろうか。われわれはそれが記号系の<再帰的動き>（recursive move）であることを知るだろう。すなわち何かを知覚するということは、知覚的素材としての知覚項を新たな知覚項へと制作し直すことである。

記号系の<再帰的動き>について若干説明しておきたい。数学の分野では記号を構成的に定義する場合、再帰的アルゴリズムが用いられることがある。一例として階乗関数がある。階乗関数 n!の定義として、ひとつに n!＝1･2･3…n という式が考えられるが、…という曖昧な部分を含んでいるかぎり、階乗を構成するためには役にたたない。そこで、次のように定義することがおこなわれている。

0! = 1

n>0 のとき、n! =（n－1）！・n

n!の定義の右辺に(n－1)!が出現しているから、定義としては循環していると言わざるを得ない。それゆえにこの種の定義は<再帰的>（recursive < re=again, back + cursive <curio = to run）と呼ばれる。しかしながら、右辺の式は左辺の式より単純であり、n が 0 の場合には、0!＝1 であること（関数の意味）が確定している。実際に独立変数 n が与えられれば、再帰的アルゴリズムの手順という<動き>を実現することで従属変数が一意に割り出されるだろう。さてわれわれは、数学的比喩を正面から受けとめつつ、知覚に源泉をもつ認知と行為のあらゆる記号過程を基本的に記号系の<再帰的動き>と解することを提案したい。なお、ここにいう<動き>は言うまでもなく身体性の働きをいう。

人が知覚というプラクティスの形態で対象のカテゴリー把握を実行するための第二の要因は、アブダクション（abduction）である。鳩について知覚項を構成するためにおさむ君が素材として何らかそれより単純な知覚項を知識のストックに収

めていたのは疑うことができない。それがどんな知覚項かを調べる仕事は心理学の領分なのでその点はさて措くとしよう。問題は、おさむ君の鳩の知覚が知的直観などではなく広義の<推論>であるなら[11)]、新たな知覚を構成するさい発動される推論方式は何だろうか。アブダクションしか残されていないのではなかろうか。なぜなら<演繹>が一般的なものから個別的なものへの――一般法則から個別事例への――移行であるとするなら、鳩の知覚とは<あぁ、これが鳩なるものだ>という一般性の発見であるかぎり演繹が介在する余地はないからであり、<帰納>がそれとは反対に個別的なものから一般的なものへの移行であるとするなら、おさむ君が初めて鳩に出会った以上、個別的なものを個別的なものとして推論に取り込む帰納が適用できるはずはないからである。こうして残る方式で最も有力なものはアブダクションなのである。

アブダクションを説明するやり方はさまざまあるが、要するにそれは既得の知覚項に対して説明をほどこす仮設を構成する操作のことである。そのためパースはアブダクションをしばしば単に<仮設>（hypothesis）とも呼んでいる。

アブダクションのなかみを図式化すると、次のようになる。

Q である。しかし P⊃Q

従って P

論理学者ならば、これはひどい誤謬だというに違いない。（詳しく言うとこの種の推論は「後件肯定の誤謬」（the fallacy of affirming the consequence）と称されてきた。）たしかに論理的にはアブダクションにはなんら必然性がない。にもかかわらずそれは<仮設>として十分に「正しい」ことがある。おさむ君の場合、すでに知識のストックであった知覚項を Q として、このなかみを P という仮設（<これが一般にポッポなのだ>）が説明するという理解が形成されたと見なしうる。

おさむ君が鳩の出現に立ち会って構成したその知覚は仮設構成の働きをおこなう。そのかぎりで二度目以降に発動される単なる現実追認の働きをおこなう知覚とは異なっている。（とはいえ、両者を絶対的に切り離してはならないだろう。）強調したいのは、この種の知覚が対象の形相を把握しカテゴリーを産出するという側面である。その意味でこの種の知覚は<発見>というよりむしろ<発明>である。

しかし問題は言語音の生成である[12)]。それは次のように生じる――鳩の知覚が進行するのに踵を接しておさむ君は初めて言語音を口にするだろう。それは知覚のさなかからその沈黙をやぶって音声が溢れ出したかのようである。言語音はあたかも知覚項をなぞりつつその内容を確証するために創られたようにおもえる。

ここにも記号系の<再帰的動き>――言語音による知覚項のなぞり――を指摘しなくてはならない。感覚的メディアを使用して描かれた知覚項のうえに言語的メディアの薄紙をのせその上から問題の鳥類をその形相のとおりに描きだしたのである。言い換えれば、黙示的なものを赤裸々にすること――つまり明示化することが

言語のヴァーチュ（virtue すなわち長所であり効能である）にほかならない。それゆえ言語とは基本的に明示化のための人為的仕掛けである。

言うまでもなく、言語音の離散的構造が明示化の主たる動因となっている。言語の働きは要素的なものを析出しそれらを結合して事態の表現を形成することである。もっとも、この分節化の働きはどこまでも稠密で不透明な辺縁から切り離されることはないのだが。

生成した言語音はどのような機能を有しているのだろうか。まず指摘できるのは、当然ながらこの言語音は<鳩>という概念の言語化であるという点である。言い換えるなら、/ポッポ/ は知覚されたかぎりでのこの鳩（知覚項）を概念の事例として例証する。一般にこの種の記号機能において認められるのは、双対する関係が単一な記号機能へ統合されるプロセスである。すなわち一面ではタイプとしてのカテゴリーがそのメンバーを包摂するという関係がある（カテゴリー把握）。この関係を、知覚項に特定の種類のラベルを貼付することと言い表してもいいだろう。もう一つの面としてこの個別的な知覚項が問題の言語音に孕まれた概念内容を代表するという関係がある。すなわち、あるタイプの鳩（知覚項）が<鳩>というカテゴリーを指示するのである。知覚項はこの関係において自己を提示することになるし、また事実上自らを当該カテゴリーの典型の地位につけることにもなる（準分節化）[13)]。

以上を要約すると、初発の言語音とはカテゴリーの典型を創出する仕草にほかならない。繰り返すことになるが、これは記号系の<再帰的動き>がトークンとしての鳩の知覚項をタイプの担い手として提示する仕草なのである。こうしてわれわれは、第一回目の言語音が生成する場に<例示>（exemplification）の機能を見出す。グッドマンが指摘するように、<例示>は所有（possession）と指示（reference）との統一である[14)]。初めての言語音/ポッポ/ は確かに知覚項と属性を共有しているし、反対に、知覚項は言語音へと指し向けられている。<例示>という記号機能は記号系のこうした自己関係のことである。――これは記号論をはじめ一般に哲学的思考にとってこのうえなく重要な論点である。言語の働きの原始的形態は<示し>（showing; Zeigen）であって<語り>（saying; Sagen）ではない。

4　共鳴する身体と自己聴取

言語音が生成するためにはさまざまな身体性のアプリオリがある。その一つとして、<世界が奏する音に共鳴する身体>という音声学的機構（phonological constitution）を指摘しなくてはならない。例えば、産院のベッドに寝かされた赤ん坊が何かのきっかけで火のついたように泣き出すと、同じ部屋のもう一人の赤ん坊も――振動する音叉を別の音叉にちかづけると、それもまた振動し始めるように――泣き始めることがある。これは心理学的文脈では<共感>（sympathy）ないし<引

き込み>（entrainment）の現象であるが、当面の記号学的文脈では<共鳴>（resonance）として概念化できる[15]。

人間は生まれた途端に言葉を話すわけではないが、生まれ落ちた瞬間に言語音以外の音響つまり産声をあげることを嚆矢として、それ以降さまざまな場面で――自動的にあるいは他動的に――音響をさかんに作り出しながら育ってゆく。音響を作り出すシステムを<楽器>と呼ぶとすれば、人間は<自発的楽器>であると言わなくてはならない。なぜなら、発声の自動性と他動性がやがて能動性へ転化してゆくことを顧慮するとき、われわれの音響生成機能の基礎に<自発性の原理>を認めざるをえないからである。それは熟慮や計画による意識の営みではないが、とはいえ太鼓を撥でたたけば音がでるという式の機械的反応でもない。われわれの奏法は人間があるということ（人間の存在構造）の積極性（positiveness *sui generis*）の表現なのである[16]。

言語音の生成を制約する二つ目の身体性のアプリオリとして、作製された音響の<自己聴取>（self-audition）をあげようとおもう。フランス語で<自分の声を聴くこと>（s’entendre）が<意味を理解すること>を言うように、身体性の転調としての言語音が生成するためには、それもまた身体性の転調である<自己聴取>が形に添う影のごとくもろともに生成しなくてはならない。人間的表現は基本的に記号系の<再帰的うごき>（recursive move）である。<自己聴取>が<再帰的うごき>の構造をなすことは容易にこれを確認することができる。これまでそうであったようにこれからも、言語の働きのさまざまな位相において繰り返し<再帰的動き>をわれわれは垣間見ることになるだろう[17]。

人間は言語音を作り出しながら自分の耳の奥底でこの音を言語音として聴き取っている――あるいは逆に、自分の耳で言語音として聴くことができない音響はどこまでも単なる音響でしかない[18]。

ここで言及された<可能性>はたんに経験的意味でいわれているわけではない。言語音を制作しまた聴取するという経験が初めて可能になるためのアプリオリな制約をいうのである。それゆえ聾唖者が言語能力をもちながら音声言語はもちえないのは何故なのだろうか、と問うことは決して無意味ではない。聴覚がないのだから音声言語が可能であるはずもないという返答は曖昧でしかないだろう。音声言語が音を媒体とした記号系である以上、聴覚をもつことが音声言語の成立する条件だと漠然と信じられている。しかしこの言い方に従うなら、視覚をもたない人は絵画的表現をおこなえないことになる。絵画的表現が視覚イメージを媒体とした記号系である以上、視覚をもつことが絵画的表現の成立する条件であるはずだからある。ところが事実はこれに相違している。視覚障害者はまぎれもなく<絵を描く>ことができるのだ[19]。

この事実の確認に基づいて一つの類推がなりたつ。聾唖者が音声言語をもつこと

ができないのは、経験的な意味で聴覚がないからではなくて、音声言語が要請する<再帰的うごき>の回路――身体の自己性の回路――を構成することができないからではないだろうか。換言すれば、聴覚が可能にする<自己聴取>と類似しながらも聴覚の感覚様相とは異なる様相で実現される自己性の構造を音響に関して構成できないからではないだろうか[20)]。

5　数学の生成論

ここまでの議論は、哲学をベース（根拠地）として認知心理学および言語学とを横断するかたちでなされてきたが、そこで抽出された記号論的な基礎概念としての<再帰的動き>と<仮設構成>（abduction）は、じつはより抽象度の高い記号の働きの中にも見出すことができる。

これまで議論されてきた言語という記号系と人間性（human nature）の結びつきについては素朴にこれを信じうるものの、これとは対照的に、数学という記号系は純粋に形式的であって人間性とは関係がないと考えられることが多い。ここでは、数学という記号系に関しても、ここまで議論されてきた記号論的な基礎概念が見出されることを論証する。これによって<記号>という存在者についての理解を深めると同時に、言語がいかにして生成するかという問いの解明にも寄与することを目指したい。

われわれは数学および数学史の哲学を研究した J. カヴァイエス（Jean Cavaillès）が、自身による数学史研究から抽出した二つの概念を分析のための導きの糸とする。というのも、カヴァイエスの主要な概念である<主題化>と<理念化>の二つを検討してみれば、それらが<再帰的動き>と<仮設構成>に通底した基本構造を有していることが見出されるからである。まず、主題化（再帰性）について明らかにしよう。

記号の<再帰的動き>とは、記号系を作り直す動き（remaking）であった。すなわち、知覚においては、知覚的素材としての知覚項を新たな知覚項へと作成しなおすことであり、言語においては言語的素材としての意味を新たな意味へと作成しなおすことであった。これを一般化すれば、<再帰的動き>とは、既存の記号を素材にそれを再組織化することによって新たな意味を制作することにほかならない。この再制作の動きは、カヴァイエスが定式化した<主題化>の動きに通有する構造をなす。

主題化（thématisation）とは、数学の歴史的な<生成>（devenir）、理論構造の<重ね合わせ>（superposition）の動きである[21)]。ここで数学の歴史的な生成とは、具体的に理論が構成されていく理論内的なステップが考えられている。理論構造の<重ね合わせ>を具体的に理解するために、（架空の例として）自然数と濃度の計算を考える。自然数は、それが０から１ずつ数え上げていくこととして理解されているときには、終わりのない数の系列を表象している。０からどれだけ１を足していっても

最後の自然数に到達することはないだろう。このとき、自然数というものを、<経験的に０から数えられたことのある数>ではなく、<アプリオリに０から数えることのできる数>として理解するとき、初めて自然数の全体が見渡されることになる。すなわち、自然数であるものとないものとが明示的に理解されるのだ。実際、経験的に数えられた数が自然数であるならば、いまだ人類が数えたことのないある数が自然数かどうかはそのつど検証する必要があるはずである。しかし実際そのようにはならず、われわれは自然数の可能的存在者を規則性によって知ることができる。

このように、操作（ここでの場合であれば、０から１ずつ数え上げていく操作）が実行される領域の全体が構成されることを<完備化>（accomplissement）という。さらに、完備化された自然数は新たに操作の対象になりうるものとして与えられる。例えば、カントールの考案した<濃度計算>においては、自然数全体の集合の要素と、他の集合の要素の間に一対一対応をつける写像を考えることで、その集合の要素の数を分類することができる。そこでは、自然数全体が見渡され、そのことによって自然数は操作の結果ではなく操作の対象となる。すなわちそれを他の集合と比較してその集合の要素の数を測ることができるようになる。これが、理論構造の<重ね合わせ>である。すなわち、自然数という理論構造が完備化されることで、その上に濃度計算の理論構造を重ね合わすことが可能になるのだ。

カヴァイエスは、対象領域上の操作（あるいは演算。どちらも opération）を記号の<振る舞い>（gestes）と呼ぶ[22]。すなわち、上の事例をまとめると、ある理論的水準における記号の操作的な「振る舞い」には、その水準に固有の対象が属しているのだが（上の事例であれば自然数の数）、その振る舞いが完備化されれば（自然数の全体が見渡されると）、今度はその操作を対象とするような新しい操作（濃度計算）を有する理論が生み出される。数学史上にこのような事例を見つけることはそれほど難しくはなく、新しい理論形成の場面においてはむしろ一般的であるとさえいえる[23]。

この主題化の動きを可能にするものが記号の再帰性である。すなわち、振る舞いの重ね合わせが可能であるのは、振る舞いの対象も振る舞いそのものも共に<記号>だからである。数学の歴史的な生成は、毎回一から作りなおすのではなく、すでに作られ、使われている概念を組みなおし、あるいはずらすことで、そこに新しい<記号の振る舞い>を見出していく営みである。つまり、記号は記号の形式を示す一方で、同時に、別の水準においては形式に対する素材としての役割も担うのである。言い換えれば、数学の歴史的な生成とは、ある一つの世界制作である。それはすでに作られた世界を、絶え間なく作り直していく営みに他ならない。ただしその一方で、そのような制作のプロセスには強い制約も課されている。そのつど作りなおされる世界は、すでに作られた世界が発している問題によってそのつど規定されなければならない。つまり、前進的な再帰的動き[24]は、理論の要求に応える仕方でな

されるのである。

以上のような事態を、カスー=ノゲスは以下のように評している。「創造が十全化（adéquation）[25]」であるとすれば、ガリレオの幾何学から出てくることのできるすべてのものはすでにそこにあったのであるが、しかし十全化が創造であるならば、それは単に可能的なもの（possible）としてそこにあったのである」[26]と。ここでの<可能的なもの>とは<潜在的なもの>（virtualité）と言い換えてしかるべきである[27]。潜在的なものは、それが現実化（actualisation）していく生成運動の中で自らを明らかにしていくのだが、だからと言って、その運動が最初から<可能性>として尽くされているということを意味するわけではないようなものである。

このような生成運動において、再帰的動きは本質的に有限である。逆に言えば、潜在性とは、再帰的動きがもつ<有限性>の背景を概念化したものだともいえる。なぜなら、有限性とは、再帰的動きがつねに不十分で完了されないことを意味するのではなく、それが完成され自己を閉じるとしても、いや（理念化によって理解されるように）むしろ完成されるからこそ、次の再帰的動きに対して<開かれる>ことを意味するからである。換言すれば、<潜在性>とは、現実化の条件であり現実化のいわば裏面である。

そして、この<有限性>が、記号における生成の<連鎖性>（enchaînement）を可能にする。数学における主題化による生成は<無からの創造>ではなく、常にすでに作られたもの作り直しである。そして、この作り直しという制約が、それ以前の過去を必ず引きずらなければならないという<連鎖性>を引き起こす。「数学者の活動全体の核心は、自分自身の表現を覗き込んで、その表現を拡張すること、またはその表現をより的確に形式化することに存している」[28]。一方で、数学の記号系は恣意的であり、その操作は恣意的な規約に基づいていると言われることがある。しかし、そのような理解は、記号の歴史的生成における連鎖性を見失う点に起因している。連鎖的な再帰的動きを瞬間において捉えることで、あるべき連鎖性が見失われ、結果的に記号使用の恣意性が発見されるというわけだ。しかし、この上なく「抽象的な」数学における記号の生成でさえも恣意的なものではない。それは<連鎖性>を介してのみ可能になるのである[29]。

6　理念化（カテゴリー化・投射）

その一方で、<理念化>（idéalisation）は<仮設構成>と共通の基本構造を有している。<仮設構成>とは、Qであるとき、PならばQであることから、Pであることを結論するような推論形式であった。理念化とは、操作の形式性に従ってその対象領域が理想的な仕方で拡大され、それによってその操作の形式的な本質が顕にされる事態を指す[30]。例えば、自乗の操作によって構成された数から、その自乗された

数を計算することができる。この操作を数一般に拡大することはできない。すなわち領域が自然数に制限されている限りは、問題の操作を遂行しうるのは、自然数の自乗によって成り立っている自然数（例えば４や９）の領域に対してだけである。この場合、可能的操作の側から、その操作の結果である対象の領域を拡大することにより、それまで不可能であった操作を遂行可能なものとすることができる。すなわち、自乗すれば７になる数を、$\sqrt{7}$ として――これが操作そのものの記号化であることに注意しよう――以前の領域に付け加えるのである。このとき生起したのは、あらかじめ在る対象に対して操作が実行される（例えば自然数上の和算）場合とは逆の再帰的動き――実行されるべき操作の側から対象が構成されるという逆転した動き――である。この転倒こそ<アブダクション>における逆転現象と同じである。<アブダクション>においては、Ｑであるという事実から、ＰならばＱであるということを見出し、したがって、Ｐであったはずだと推論する。<理念化>においては、すでに実行可能な操作がＱであり、理念化によって領域が拡大された操作がＰである。そして、そのようなＰにおいてもＱが成り立つならば、Ｐであるとするのである。

この種の転倒したプロセスは、ある命題あるいは操作を特定の領域上で普遍化する（何らかの領域に相対的に普遍量化子をつけること）上で決定的に重要である。すなわち、ある操作を領域上で常に可能な操作として完備化する[31]ためには、このような理念化が必要不可欠である。<理念化>によって、記号は一つの地平を獲得することになる。しかし、その地平は最初から実在したわけではない。<理念化>によって地平として投射されたものである。おそらくは自然数という最も素朴で、われわれに最もなじみのある対象でさえも、このような<理念化>のプロセスを経験しているといわなければならない。すなわち、自然数は一つずつ数え上げていく操作の理念化である。自然数が自然数として完備化され（すなわち自然数と自然数でないものとがアプリオリに決まり）、一つの対象としてわれわれが思考しうるのは、それが理念化されているからに他ならない。

<理念化>は、<主題化>とは反対に、無限なもの（カテゴリー的なもの）を記号によって実現する。しかし、この無限なものは<主題化>における有限なものと対立するのではなく、互いに協調して働きあう。<理念化>が記号によって実現する無限なものは、潜在性とはまったく異なる様態である。それは規則的であるからこそ、無限である。なぜなら、本質的に運動的で、不可能性や不規則性と隣接している<主題化>とは逆に、<理念化>による無限性は静的で一般的なものだからである。言い換えれば、その無限なものとは、その規則、操作、カテゴリーが実現（réalisation）しているポテンシャル（potentiel）、あるいはその操作を<なしうる>（pouvoir）ということなのである。

7　二対の構成的動きと記号の身体

言語音の生成における<再帰的動き>と<仮設構成>（あるいはカテゴリーの投射）、そして数学の生成における<主題化>と<理念化>という二対の構成的な動きにとって、<身体>が決定的な役割を担っている。<身体>はそれらの二つの運動の場あるいは媒体であり、また素材でもある。そしてそれらの動きの可能性の条件でもある。例えば、言語における<自己聴取>の働きに顕現する<言語的身体>は比較的に身体の具体的イメージと重なるところの大きいかもしれない。しかし、<習慣>において確認される身体性は、比較的抽象度が高いといわなくてはならない。カスー＝ノゲスは数学の生成に関して<数学的身体>の役割を論じている。そこで、一般に記号系の制作を担う<身体性>について再考するために、カスー=ノゲスの議論を取り上げることにする。

カスー=ノゲスは<数学的身体>をこのように論じている。

> 「[数学における]最新の定理は、数学的<身体>（corps mathématiques）を完成しにやってくる一つの器官以外のなにものでもない。定理の拡張は、数学的<身体>の焼き直し、その再組織化を表象している。見る身体が自らを見えるものとするように、パロールが自身で打ち立てる意味作用の秩序の中に入り込んでくるように、[数学においても]表現が自らへと立ち戻ることができるということを、数学者はずっと以前から知っており、それを実地に体験している」[32)]

ここでは、<身体>とは再帰的動きの有限性の結果であり、同時に条件でもあるものとして論じられている。この一見パラドキシカルな事態は、<身体>を介した再帰的動きから帰結する。メルロ=ポンティの意味での身体とは<見るもの>（le voyant）であると同時に<見えるもの>（le visible）であった。数学における身体もまたそのようなものである。例えば主題化の場合、自然数の全体は理念化の構成的な動きの結果である。そのように構成された自然数を条件として濃度の計算への主題化が遂行された。そのとき、構成の結果である自然数は、その上での再帰的な構成の素材であり、その構成を引き起こすための条件でもある。すなわち、この意味での<身体>は、その上での固有の経験の循環的運動を可能にするものであると同時に、その運動によって再組織化される<存在者>の素材でさえあるのだ。

メルロ=ポンティは、知覚を身体による世界の<表現>であると考えた。<表現>という概念が含意しているのは次のような事態である。すなわち、<見える>ことあるいは<可視性>（visibilité）を支えているのは、沈殿した過去であり、そのようなものである限りの<観念性>（idéalité）だという理解である。われわれは常に過去によ

って現在を見ている。そして、そのような理解の下での<身体>とは、現在がそれによって表現する過去である。この三者関係、すなわち<可視性>、<観念性>、<身体>の関係は、われわれが論じる<記号>の基本構造を表している。

身体を介した<可視性>と<観念性>の間の絡み合いは、言語において明らかである。言語的記号の意味は、その固有の過去である<使用>[33] によって可視的になる。すべての言語表現は、<として>という図式を有しており、記号をその図式のもとで使用する限りにおいて表意の働きをする。

数学においては、記号によって表現された図や式は、一見すると言語のような<として>という図式を有していないようにも思える。つまり、言語よりも<として>で結ばれる記号と意味との間の距離が直接的であるように思えるのである。しかし、それは数学の記号による可視性が、観念性とほとんど区別できないほどに接近しているからである（そしてこの距離感が数学の記号の独自性を形成している）。例えば、三角形の図形は観念的な<三角形>として可視的になるが、この<図形>を三角形の<観念>と見分けるのは困難である。しかし、そこに見える三角形が三角形であるのは、それを三角形たらしめている三角形の観念性によっている。なぜなら、「三角形なる理念的存在者が物理的世界に存在する」ことは理解不可能だからである。一般的に数学的記号系の特殊性は、記号系が含意する観念性が現実的で可視的な理論構造とほとんど識別不可能だという点にある [34]。

以上のような<可視性>、<観念性>、<身体>の三者関係を、<主題化>と<理念化>という二つの構成的動きと考え合わせるとき、三者関係の含意する生成のダイナミズムが自ずと了解される。<理念化>とは、<観念性>を<可視的>な<理論構造>において実現することに他ならないからである。例えば、理念化された自然数は、数を数えること<として>見られていた観念性が、身体において具現されたその可視性である。また、幾何学的な対象としての三角形は、経験的な図形に透けて見えていた三角形の観念性が幾何学の理論構造という身体によって可視的になったもの以外ではない。

数学の観念性が――プラトニズムの主張には反して――徹底的に歴史の刻印を帯びているのは、理念化の上になされる主題化という<再帰的動き>のせいである。理念化は観念性を理論的構造によって可視的なものとする。さらに主題化は、観念性と可視性が完全に一致した地点においてはじめて実行可能なものとなる。観念性が可視性と一致したとき、その可視性は新たな理論の対象となるが、新たな理論とのつながりで出現する<観念性>はもはや最初の観念性と同じではない。その上、そのような重ね合わせは、単純な階層化というよりもむしろ再組織化なのである。すなわち、この再組織化の運動にあわせる仕方で、観念性そのものも侵食されていくのである。例えば、単なる自然数と、濃度計算の対象となる自然数が重ね合わせられた自然数とでは、自然数の可視性は同じ観念性を維持しているわけではない。

数学が言語とは異なる固有の生成のただなかにあるのは、以上のような<観念性>と<可視性>との距離に由来している。しかし、その一方で、数学も言語も、同じような三者関係と二対の構成的な動きを内包している。言語という記号系は、数学が生成する場合と同じように、<再帰的動き>と<仮設構成>という構成原理を内含している。にもかかわらず、言語は数学とは異なり、沈殿した過去性をその都度の現在においてすべて参照することはない。言語の過去はしばしば忘れられる[35)]。しかし、両者のこの違いは、<可視性>と<観念性>の間の距離の違いに起因するものであろう。

8　三層構造としての言語音

ふたたび言語音の生成に観察を集中することにしたい。これまで初発の言語音について、正確さを犠牲にするのは承知で便宜的にそれを /ポッポ/ と表記してきた。しかしながら、言語音の生成を考察するためには、正統的言語学がそうしたように、言語音を単なる分節音に還元してしまう拙速を避けなくてはならない。それではこの表記に替えて言語音をどのように表せばいいのだろうか。

正統的言語学のパースペクティヴから望見すると、言語をめぐる探究として三つの言語学的部門――言語学、パラ言語学、運動学――が成立しているのがわかる。（ちなみに、最後の<運動学>はおおよそ<ノンバーバル・コミュニケーション研究>と呼ばれる分野に相当する。）従来これらの部門は別箇に研究されおのおのから得られた知見が統合されることはなかった。しかしながら、<言語>の存在論を明らかにするためには、<言語なるもの>のあり方を新たに捉えなおす必要がある。そのためには、言語学的部門の並立に起因するばらばらにされた言語イメージを一つの言語像へ統合しなければならない[36)]。

このようにして<言語なるもの>は三つの層をそなえた統合的構造――言語-パラ言語-身体運動の統合構造――として現れることになる[37)]。統合的構造の充分な理由（sufficient reason）を論証しこの構造を詳しく観察・記述することに紙面を費やすことはできない。ここでは統合的視点から直接もたらされる<言語音>の構造に手短に触れるだけにしたい。

言語音は分節音とプロソディーおよび身体運動の明示的かつ黙示的構造が統合されたものである。いうまでもなく、従来、<分節音>は正統的言語学の一部門としての音韻論（phonology）が扱ってきた。次の<プロソディー>であるがここでは従来の理解よりひろくこのカテゴリーを設定したい。従来は、韻文のリズムを調べる韻律法はしばらく措くとして、発声のリズム、強勢（ストレス）、抑揚（イントネーション）、高低（ピッチ）、音調（トーン）など分節音以外で言語学的に有意な音声要素をこのカテゴリーに含めていた（結果として韻律法がここに含まれることに

なる)。すなわちこれは音声学（phonetics）の領分なのである。

これに加えて、いわゆるパラ言語学的要素もすべてここに含ませることにしたい。主要な要素を少数挙げれば、音声の質、発話に介入する沈黙（これはもはや音声ではないが、しかし雄弁にものを言う！）、ノイズ（言語音を攪乱すると同時にその材料となるもの)、音声としての笑い、同じく泣き、溜息などなど、である。

最後に、逆説じみたことだが<身体運動>を言語音の構造要因に数えなくてはならない。そもそも言語音が身体運動の所産にほかならないかぎり、身体のうごきが――明示的にあるいは黙示的に――言語音の構成に内的に寄与しているはずである。この点が見やすい言語現象は言語音の表情性である。言語音は必ず表情をおびている。例えば、言語音としての笑いはそれだけで完結するわけではない。笑うときの顔の表情（例えば、<顔をくしゃくしゃにする>）や姿勢（例えば、<お腹をよじって笑う>）が発出された言語音の背後に展開されていることを見落とせない。ここに分離を持ち込むのはあくまでも便宜の問題にすぎないのであって、この<分離>を言語の存在構造に持ち込むとき、言語は死んでしまうだろう。

言語音の構造にふさわしい表記として、例えば {ポッポ運動}-〔ポッポ〕-/ポッポ/ のような案が考えられる。ここに見られる短い棒は言語音を構成する三つの成分の統合を意味している。しかし単一の言語音を表すためにこうした表記を使用するのは煩わしいというなら、#ポッポ# のように略記することがいいかもしれない。重要なのは、/ポッポ/ が単に音素の表記にすぎないのとは異なり、#ポッポ# は統合体としての単一の言語音を表すという点である。

われわれの見るところ、言語の存在論を誤らないために統合主義的アプローチは是非とも必要な見地である。それにもかかわらず、何らかの<分離>を持ち込むことなしには言語を観察し調べることはできない。言語探究につきまとうこの無能力がどこに由来するかについていま詮索はしないでおく。いずれにしても、単一の学科である<言語学>（a discipline）が――それが<統合>を標榜するにしても――統合体としての言語を研究しうるという観念は誤りである。

現行の言語学的探究について見ると、実際にそれが音声部門・統語部門・意味部門など各種の部門にわかれて研究をおこなっているのがわかる。ところが分離主義の制約のために、正統的な言語探究は学知としての断片化と理論的暗礁に逢着している。これとはかわって、統合主義的アプローチは言語学的諸部門の分業を認めつつも、当該の部門において何か問題を考究するにあたり、それに固有な概念システムをつねにその潜在性ともども生きなおす試みを怠らない。換言すれば、有効な概念をつねに発生状態において保とうとするのだ。例えば、ソシュール言語学における<ラング>は<パロール>から切断されることで概念としての成立を保証されたと誤って信じられてきた。しかし統合主義から見れば、<ラング>が<パロール>から分離したことではなくて、分離がつねに未完了なままであるという力動性に理論的

意味が存している。逆に言うと、統合主義的アプローチのもとで初めて、個別的な<パロール>が<ラング>の体系性に効果を及ぼすという<交錯>（chiasme）を理論的に検討することが可能となる。

言語音の構造をこのような三つの構造の統合体あるいは<構造の厚み>として捉えることに対する異論があるとすれば、それはこの種の<構造の厚み>が論理形式の担い手ではありえない、論理形式は分節音が表示する構造にのみ担われる、というものであろう。ここで議論をする余裕はないが、われわれの考えではこの反論は成り立たない[38)]。

9　模倣の仕草としての言語音

自発性としての模倣

「おさむ君が生まれて初めて #ポッポ# という言語音を作り出した」という言明がいわんとすることは、この子が、<構造の厚み>としての言語音を口にする身体運動を初めて遂行した、ということである。いまやわれわれは、言語音 #ポッポ# がどのように生成されるかを記述する準備を整えたことになる。

おさむ君が公園の広場で出会った鳩を #ポッポ# という言語音で掴まえることができるためには、彼に模倣の生得的能力がそなわっている必要がある。なぜなら、#ポッポ#という音声は、そもそもこの言語音によってカテゴリー把握され概念化された対象の属性すなわち鳩という生物種がもつ特性のひとつ（鳴き声）であり、おさむ君はこの特性を反復したにすぎないからである。一般的にいって、ある対象についてその振舞いや性状を模倣するためには、模倣者が自ら当の振舞いや性状を反復しなくてはならない。しかし属性を共有することができればただちに<模倣>が成就されるわけではない。一個の 100 円銀貨が別の 100 円銀貨の属性を共有するからといって、「前者が後者を模倣する」と言うのは奇妙である。模倣には類似が必要条件となるが、類似は模倣の十分条件ではない。とはいえ性急に事を運んではいけない。模倣には模倣の明示的意図が必要であるといえば、それは言い過ぎだろう。問題は<意図せざる模倣>であり<我知らず真似してしまう>振舞いなのである[39)]。

おさむ君がやってみせた模倣行動は、おさむ君が言語音を口にしたこと――これはある種の身体運動である――が<主体が対象の属性を共に（sym）すること>であるかぎり、まさに<共鳴>ないし<共感>（sympathy）にひとしい。問題の属性にそのまま感情性（pathos）が浸透していることも明らかだろう。言語音の生成に介在する<模倣>は意識以前の身体性の水準で発動する。それはわれわれの自発性が発露するかたちにほかならない。

自発性の発露としての<模倣>は表象主義とは無縁の営みである。この点を確認しておこう。コメディアンが演技としての物真似をする際には、この模倣のプロセス

には確かに表象が介在しているかもしれない。まずコメディアンは、著名な俳優がどんな仕草や表情をしているのか観察してそれの特徴を抽出するだろう。さらに仕草と表情を惹き起こしたはずの心意を俳優の身体運動のいわば背後に探りだすだろう。こうして、これら二つの表象を結合することによって、知覚されたままの身体運動をいわば<運動の言語>に翻訳するのである。コメディアンの演技とは、こうして形づくられた<運動の言語>を今度は自分の身体の動きとして再現することにすぎない。しかし幼児の模倣にとっては、この種の翻訳や翻訳の身体的再現とも無縁な営みなのである[40)]。

このようにして、世界が奏でる音響に共鳴する身体が発する言語音には二つの条件がある。第一には言語音それ自体が充足すべき<属性の共有>という形而上学的条件である。第二には言語音が身体性の転調であるかぎりで発話の主体（sujet parlant）がそなえるべき<模倣>という生得的能力である。これらの条件が現実化されたなら、おさむ君は#ポッポ#という言語音を生まれて初めて作り出すことになるだろう。

言語音の〈アイコン性〉

記号にはどのような種類があるのだろうか。記号のタイプを分類する課題にパースが一途に取り組んだことはよく知られている。いく通りか案出された記号分類のうち最も人口に膾炙されたものは、アイコン（類像）・インデックス（指標）・シンボル（象徴）という三つ組みであろう。ここまでの考察から、初発の言語音が類像性をそなえることはただちに見て取れる。鳩を#ポッポ#という音声によってカテゴリー把握できたのは、この言語音と鳩がある属性（音声としての鳴き声）を共有する点で類似しているからである。

しかし初発の言語音がアイコンだ――つまり<アイコン>という種類の記号である――というのは正確ではない。なぜなら何かあるものが記号でありそれが実際にアイコンだとしても、記号というものの常態として、それは別のタイプの記号に成り代わりうるからである。例えばある宰相の銅像は本人を表すアイコンであるが、素材中の同位元素が制作年代の手掛かりとなるかぎりにおいてインデックスでもある。またこれに三人の歴代首相の銅像を追加して、それぞれを近畿四県のシンボルとして随意に使用してもかまわない。それゆえパースによる記号分類の眼目は記号タイプの類別ではなく記号機能の類別にあると言わなくてならない[41)]。

音象徴　――言語音の生成相

おさむ君が初めて作り出した言語音がアイコン性を呈するということは、この語がオノマトペであることを言うのだろうか。一見すると事態はそのようにも見える。なぜなら#ポッポ#は確かに鳩の鳴き声に類似する音声として聴取されるからである。とするなら、あらゆる語彙がオノマトペに起源をもつことになるだろう。だが

こうした推断は――論証すべき命題を前提に立てているという意味で――<論点先取>の過ちを犯している。#ポッポ#が鳩の鳴き声の模倣であるという前提は、この言語音がオノマトペであることを意味するからである。初発の言語音（われわれの例では#ポッポ#）が属性の反復によって構成されたという命題は、その属性が必然的に音声であるという命題を含意しない。選択される属性は鳩の仕草でもまた形態でもよかったのである[42)]。

言語音が呈するアイコン性の根拠は記号系の<再帰的動き>という形式性にある。この形式をどのような属性で実質化するかは別の問題なのである。にもかかわらずこの形式性が言語音の制約であるかぎり、反復される属性は音としての質をもたざるを得ない。換言すれば、原初の言語音はそれが代表するものに必ず音の質を付与するのである。あたかも夜の更けゆくさまが<しんしん>という音声で象徴されるように。こうした意味で言語音はつねに<音象徴>(sound symbolism)として生成する。言い換えるなら、音象徴は――言語音が生成する際にとらざるを得ないその姿態(species)であるという意味で――言語音の生成相にほかならない。ここに視点をとるとき、<擬声語>（onomatopoeia）あるいは<擬態語> (psychomimes; phenomimes)という語彙の分類が派生的なものにすぎないのは明らかだろう。なぜなら、これらは<音象徴>を基礎にして初めて成立する語彙の区分にすぎないからである[43)]。

類似性再考

これまでわれわれは自明のことのように属性の反復としての<類似>に言及してきた。しかしこうした用語法には慎重であるべきだろう。属性の反復がただちに<経験される類似>をもたらすわけではない。<月とスッポン>の喩えがある。月は地球の約 8 分の 1 の質量をそなえた巨大な衛星でもちろん無生物、スッポンは淡水に棲む 30 センチほどの大きさの生物。この二つはどの特徴をとってもまったく類似していない。つまりこれは、二つのものがひどく異なっていることの喩えなのである。ところが月も鼈も同じように丸いと言えないこともない。だとするとこの喩えは、まったく違ったもの同士でもどこか必ず類似していると言っているわけだ。

初発の言語音が機能するための<類似>という条件を経験的意味で解してはならない。生成の相にこの<類似>を差し戻すならば、それが属性の反復を経験的類似として構成すること以外ではないことがわかる。生成が成就した後の位相に身を置きながらわれわれはそこに<類似>を見出すのである。したがって、類似を構成する属性に関しては、原理的に無際限にある属性からどのようにして有意的属性（the relevant attribute）を絞り込むのかが残された問題になるだろう。この問いについてわれわれは詳しい判断材料をもちあわせないが、考え方として言えば、属性の選択にはおよそ二つの要因がからんでいるのではなかろうか。

第一には言語音の構造体系上の制約である。初発の言語音は事実上あるいは現勢

的には（virtually or actually）もちろんただ一つしかない。しかしこの言語音は一方で本来的あるいは潜勢的に（essentially or potentially）他の言語記号とかかわりをもっているし、他方で現勢的にも多くの記号――知覚項や運動その他の記号――とかかわりを有している。言い換えるなら、唯一の言語記号がじつは潜在的・現勢的な記号体系のなかにその位置を与えられていることになる。属性の選択に体系の構造性が制約を課すことは明らかだろう。

第二には、言語音がそのただなかで生成する環境――これを<記号環境>と術語化しよう[44]――にかかわる要因がある。これは言語音ではないが、仮借ない捕食者に襲いかかられた小動物があげる<悲鳴>を考えてみよう。この種の音声に多重な情報が込められているのは疑うことができない。そしてこの音声の生成に生物学的意味における<自己保存の欲求>といった要因が与ることもまず疑うことができない。この要因が生体と環境とのかかわりに由来する点を看過すべきではない。一般に対象の属性は記号機能の主体の生態学的機構の働きにおうじて限定されるのである。この論点は――必要ナ変更ヲ加エルナラ（mutantis mutandis）――人間の言語音に適用できるしそうすべきであろう。

10　言語による世界制作

言語音のインデックス性

言語音の生成を解明しようと観察を傾けるとき、ややもすれば人はホモ・ロクエンスがすでに享受している<世界>を生成の時へ遡らせてしまうきらいがある。もちろん世界がないところから考察を開始する訳にはゆかない。しかしいまは初めて言語音が出現するという尋常ならざる時である。言い換えるなら、<いま>とは世界のしじまが<言語音>の発出によって破られようとする瞬間なのである。

われわれが世界を生きる様相は、世界制作（worldmaking）の営みとのかかわりで二つの相のもとに顕れると捉えることができる。すなわち<世界>はさしあたり<制作されつつある世界>（the world in the making）と<取りあえず制作された世界>（the world provisionally made）とに二分されるだろう。たいていの場合、われわれは後者に住んでいる。とはいえこの言い方はある種の同義反復にすぎない。というのは、<世界に住むこと>という事態が多少とも十全に実現したときには、すでに世界は制作されていたはずだからである。すなわち、<世界に住むこと>と<世界の到来>はただ一つの事態であり、つねに完了相のもとで実現されてしまっている（realized）し、そうであるものとして実感される(realized)ほかないからである。しかしながら、この世界も万物流転の例に漏れない。詳細は省かざるを得ないが、世界のなかに異象が繁々と生じるようになると世界は土台をゆるがされる羽目になるだろう[45]。ゆらぎを介して世界は新たな世界へと変容せざるを得ない。ゆらぎ

の最中で変身を遂げつつある世界を<制作されつつある世界>と呼ぶことにしたい。

世界制作の観点からいまいちど言語音の生成に目を凝らそう。言語音の生成の効果として以下の事態を確認することができる。記号環境の特定のニッチにおいて言語音はいわば孵化するのだが、こうして生まれた言語音が逆に記号環境の要素（<鳩>という知覚項）を――今度は言語的に――構成することによって、<世界制作>に新たな次元を拓くのである。言語音が知覚項の属性を反復するかぎりにおいて、記号としての言語音は<インデックス>として働く。より正確に述べれば、初発の言語音は――アイコン性を有するうえに――インデックス性も具えているのだ。記号系の<再帰的動き>が第一回目の言語音をもたらしたことを思えば、ここには何ら奇妙な点はない。

急いで付け加えておきたいのは、初発の言語音に確認できるこの二重の記号機能がいずれも記号環境に制約されるかぎりにおいて、ソシュール記号学の用語でいうなら、言語音は有縁的（motivé）であるという点である。すなわち、どのような言語音にも――言語でなされた産声（linguistic first cry）としては――恣意性の形跡などどこにも見当たらないのである[46)]。

初発の言語音を<サンプル>という記号形態に喩えることができるだろう。例えば、このビーカーの水は琵琶湖の水質調査のために採取されたサンプルである。グッドマンが指摘したように、サンプルは<所有>と<指示>の二つの契機によって湖の水質を例示している。サンプルは一方では属性の反復によって水質に類似するかぎりアイコンであるが、他方ではサンプルと湖との事実上の関係――かつての経験論が重視した<因果関係>や<近接性＞など――で結合されているかぎりインデックスでもある。

カテゴリーの創発

こうしてサンプルは<例示>の機能をおこなうが、初発の言語音が発揮する機能もまた記号系の自己関係としての<示し>なのである。すなわちおさむ君が初めて口にした言語音#ポッポ#は、公園に舞い降りた鳩と事実上の関係で結び付くことによって<鳩>の言語的カテゴリーを創発する。この言語的カテゴリーの認知的内容はおおよそ<鳩とはポッポと鳴く鳥である>というものである。子供が言葉を口にするということは、言語的カテゴリーを作り出すことを通じて従前の世界の面目を一新することである。この瞬間に黙示的な世界制作（tacit worldmaking）が明示的な世界制作（explicit worldmaking）に遷移することになった。このことの意義をどんなに強調しても強調しすぎるということはない。

幼児が言語を習得してから認知的意味で<成人>するまでおそらく何度となく記号系の<再帰的動き>の発動がおこるだろう。このテーマについての理論化はこれまで<発達心理学>の名のもとでおこなわれてきた。大人の認知に関しても、例えば科

学研究のパラダイム転換や異文化の理解にさいしてやはり<再帰的動き>が発動されるだろう。いずれにしても、人はつねにそして何度でも<取りあえず制作された世界>から<制作されつつある世界>（あるいはその逆）へと身を投じなくてはならない。世界制作の<再帰性>（recuisiveness）は原理的に自然数と同様無際限なのである。

初発の言語音によって果たされるカテゴリー創発について、さらに二つの論点を指摘したい。第一は、修辞学的観点からみると初発の言語音が<換喩>の構造をそなえているという点である。われわれは、対象に帰属するメレオロジカルな関係（つまり部分と全体との関係）を基礎に成り立つ比喩の形態を<換喩>（metonymy）と称したいとおもう[47]。仮に子供が言語音#ポッポ#を口にすると同時に公園の鳩が一羽残らず忽然と消えてしまったとする。それ以前の公園の広場を見ていなかった大人はこの音声だけをたよりにして子供が何を知覚したかを割り出さなくてはならない。大人にはこの子が何かの名を告げていることは了解されているからである。子供が見たものが何であるかを突き止めるための<証拠>なり<手掛かり>なりはいま大人が確かに聴取したあの言語音だけである。それが鳩の属性に直接つながっているのが認知されたとき、答はおのずと明らかとなる。これはちょうどサンプルの水（部分）を調べて湖（全体）の水質について知るのと同様の方法である。

第二に、初発の言語音が換喩であること、さらに初発の言語音が言語的カテゴリーの創発をもたらすこと――この二つの命題を前提とするとき、<述語づけ>（predication）とは言語的換喩である、という帰結が導かれるだろう。これを理解するには、認知の働きとしての換喩が言語以前の水準に始まる事実を見なくてはならない。すなわち人やまして動物は――言語化を離れた単なる黙した知覚の水準において――対象の部分の認知を全体（あるいはその他の部分）の認知へと投射する能力を有している。例えば、練達の猟師は土に残された足跡からそれがどんな種類の動物でいつここを通過したのかをたちまちに察知することができる。この種の換喩的認知能力が言語化されたとき、われわれは<述語づけ>という方式を得るだろう。逆にいうと、述語づけとは<言語的換喩>なのである。

11　習慣とシンボル機能

パースの記号分類学で<シンボル>と名づけられたタイプの記号は初発の言語音とどのようにかかわるのだろうか。これは節をあらためて考察するのにふさわしい問いである。

パースによれば、<シンボル>とは記号表現が習慣（habit）に基づいて対象を代表するような記号の形態である[48]。しかし第一回目の言語音が構成されるとき、それを規制する習慣はいまだ形成されていないのではなかろうか。なぜなら、二回、

三回と同じタイプの言語音を繰り返し口にすることが結果として言語的習慣を作り出すと思えるからである。この疑問にどのように応じたらいいのだろうか。詳細はおいおい見ることにして、結論を先取りして言えば、初発の言語音が成就したあかつきにはいち早く当該の言語音に固有な習慣が形成されると言わなくてはならない。

記号主義における<習慣>概念を考えるとき注意すべき点は、第一に、それが日常語としての「習慣」を意味論的に分析したものではないことである。もちろん<習慣>概念が日常語の意味に関係がないというわけではない。日常語を無視したら主題について思索する道が絶たれてしまうだろう。にもかかわらず、概念秩序と語の意味の秩序とは連続と切断あるいは重なりとズレとの錯綜のうちにある。

第二に<習慣>は心理学的リアリティに無関係ではないが――というより、心理学的な意味での<習慣>に概念としての源泉をもつのは確かであるが、概念それ自体としては<心理学的概念>というわけではない。問題の概念は由緒ある用語法では<形而上学的概念>と呼びうるものでありわれわれならそれを<記号主義的概念>と呼ぶだろう。なぜなら<習慣>は物理的現象にとっての秩序やパターンの原理でもあるからである。例えば自然法則は<習慣>の賜物なのである。要するに、<習慣>は記号主義の哲学における<術語>であって、日常語や心理学的観念とは厳に区別しなくてはならない。

心理学は<習慣>を学習によって後天的に獲得され比較的に固定化するにいたった反応の様式だという風に規定している。記号主義における<習慣>概念を考えるうえでここをスタートとしてみよう。

この説明の前半部はあたかも試行錯誤（trial and error）あるいは行動の反復が習慣を作り出すと言っているようにおもえる。ところが後半部は、<固定化した反応の様式>に言及することで、習慣に関して、その一般性・理解可能性・パターンないしルールなどの特徴を抽出している。言い換えれば、ある反応の様式が一回限りのものではなく一般性をおびルールを体現しているときそれは有意味なものとなるのだが、そうした様式を<習慣>と呼ぶというのである。もし現象学的な言い方が好ましいというなら「身体が一つの新たらしい意味の核を同化したとき、身体が理解した、習慣が獲得された、といわれるのだ」と言ってもいい[49)]。

少し言い方を変えてみよう。習慣獲得を<学習>の視点から眺めると、ルールとしての習慣が形成される以前にルール化されていない行動が繰り返し反復されるのがわかる。しかしながら、この「行動」はじつは<行動もどき>でしかない。<ルール化されていない>という行動の様態については、<ルール化するもの>としての<習慣>を先取りすることで初めて言及が可能となる。習慣問題の核心をなすのは<習慣的な行動はどのようにして可能か>という問いなのである。それもまた日常的あるいは心理学的な意味での「習慣」によるのだと応じるなら、われわれは無限に

後退する破目になる。従って<習慣>概念の核心は<ルールの現実化>ということにある。そしてそれとの関係においてはじめて、他の観念（<習慣の獲得>その他）について派生的に問うことも可能となる。<習慣>は規定する概念（determinant concept）であって、規定される概念(determinate concept)ではない。

<習慣>の生成を認知の視点から見直すために、ここで<グッドマンのパラドックス>を省みることにしよう。エメラルドのうち、今日までのところミドリ色をしているもの、あるいは明日以降アオ色であることが判明するものを、一口で<ミドオ色>――これは<ミドリ色>と<アオ色>を合成した述語である――と呼ぶことにしよう。今日までに知りえたすべての証拠が「あらゆるエメラルドはミドリ色である」という全称命題を裏づけるが、しかしそれらは同時に「あらゆるエメラルドはミドオ色である」という命題の裏づけでもある。それゆえ、あるエメラルドはアオ色である！

このように帰納は正当化されない。にもかかわらず、人は事実上正しい帰納と間違った帰納とを弁別している。論理的妥当性の点で遜色ない二つの述語<ミドリ色>と<ミドオ色>を人は実際には差別している。この効果をもたらすのは、グッドマンによればどちらの述語が習慣に合致するかという経験的事実にすぎないという。現実世界に適合する述語や仮設あるいは法則などを、そうでない述語・仮設・法則から分け隔てるものを、グッドマンは<習慣の守り>（entrenchment of habit）と呼ぶ[50]。

エメラルドの色を描写するという課題に対して、人は<ミドリ色>という述語を作り出すことで応じている。なぜならそれが言語的<習慣>だからである。あるいは、人が<ミドリ色>をその他の述語を押しのけて採用するのはそれが<習慣>に守られている（entrenched）からである。すなわち、言語的カテゴリー把握は、そのまま言語的習慣の形成にほかならない。この論点を一般化するとき、われわれは、カテゴリー把握がただちに習慣の形成であることを知るのである。

任意のカテゴリー把握が習慣によって実現するなら、正しいカテゴリーと正しくないカテゴリーの差が失われてしまうのではないか、どんなカテゴリーも習慣に依拠するからである。――この疑問に対しては、以下のようにいくつかの論点から応じることができる。

第一に、<カテゴリーの正しさ>を生成の場面と経験の場面にわけて論じる必要がある。目下の議論は経験的場面の範囲を動いてはいないから、その疑念は成り立たない。（グッドマンの議論はその意味ではやや荒いといえるかもしれない。）第二に、<習慣の守り>と<習慣>とを概念的に分けるのは可能であるが、言語カテゴリーが生成するという事態においては、二つは弁別不可能ではないだろうか。つまりカテゴリーが形成されるときいち早く<習慣>がそれを支えているのだから、これはすなわち<習慣によって守られている>ということである。結局、後者の論点もやはり<生成/経験>の区別につながっている。

以上の考察から、初発の言語音とシンボルとのかかわりに関してひとつの知見をひきだすことができる。幼児が初めて口にした言語音は、アイコンやインデックスの機能を有すると同時に、それが言語的カテゴリー把握と認知の営みであるかぎりで、ただちに習慣の形成であり、それゆえ<シンボル>として機能している、と。

日常的な<習慣>には合理性（rationality）の（悟性的ではない）根拠という意味合いがある。人がある行動を遂行したとき、「どうして何のためにそのような行動をしたのか」と問うことができる。君が「なぜ君はレストランでタバコを吸うのか」と傍らの人に問われたとする。君はいろいろと理屈をいってその行動の理由（reasons）を説明するかもしれない。しかしそうしないで単に「これが自分の習慣だ」と答えることも可能だろう。（この場合の<習慣>は<クセ>とか<性癖>とほぼ同じである。）

前掲した心理学的観念では<習慣>を<学習によって後天的に獲得され比較的に固定化するにいたった反応の様式>と規定していた。こうした規定の内容と<ルール形成の原理としての習慣>という考え方は無理なく調和する。しかしながら、記号学的概念としての<習慣>に<学習>という要素を直接含めることはできない。<習慣>は（経験を可能にするその制約という意味での）超越論的概念――われわれならむしろ<記号主義的概念>と呼びたい――であって、経験的概念ではないからである。

学習理論に登場するいろいろな観念――条件反射、オペラント条件づけなど――は<習慣>概念と関係しないわけではないが、直接的なその要素でない。言語記号について、その表意作用が<慣習>ないし<規約>（convention）に基づいているという言い方がしばしばなされる。この場合の<慣習>が意味するものは必ずしも一義的ではないが、ここでは、自然的絆で繋がれていない<記号表現>と<記号内容>とを言語共同体が所有するコードにより結合した所産としての、話す主体が習得した<行動様式>と解しておく。ここからわかるのは、<シンボル>としばしば結び付けられる<記号の規約性>は、シンボルにとって本質的条件ではないということである。

精しい観察は今後の課題であるが、<シンボル>が一見その対象と自然のつながりが何もないとおもえる例――犬を/inu/という言語音で表す必然性はないように見える――においても、じつは初発の言語音にまで遡ることができるなら、その語のシンボル性の陰にアイコンやインデックスの働きが再発見できるかもしれない。そのかぎりでソシュール言語学における<言語記号の恣意性の原理>は明白に覆されることになるだろう。しかし経験科学としての言語学が、実際、そのような研究をある言語の全体に対してなしうるかどうかは大いに疑わしい。大半の言語音については、その始原はもはや回復不可能ではなかろうか。

初めての言語音が世界の沈黙をうちやぶるとき、われわれの身体性にどのような変容がもたらされるのかをここまで追跡してきた。筆をおくにあたり、われわれがどのような形而上学的構えで問題に臨んだかについて一言述べておきたい。

メルロ=ポンティは、記号系を生きるわれわれの身体がその潜在性を解き放ち、新たな記号機能を実現することを、熟した果実が裂けて種子が飛び散るさまになぞらえた。それが<裂開>（déhiscence）の比喩である。われわれはできるなら、果実が熟しつつあるその時をともにしながら飛び散る種子を見届けたいと願ったのである。すなわち言語音の外部に視点をとるのではなく、言語音の生成そのものに立会うことが目指された。本文で述べたように、従来の言語探究は<生成>の問いをもたなかったし、統合体としての言語を切り分けたその部分部分を精密に調べてきたにすぎない。これはきわめて有効だがしかし決定的な短所にみまわれた科学の方法である。

科学は言語がすでに生成を成就した完了相において単に事後的に（ex post fact）<言語>という動きの体系を扱おうとする。<言語の科学>の問いの一部は、言語に見て取れるその存在構造はどのようにして可能か、というものである。換言すれば、言語の科学は言語についてその可能性の制約を捜し求めるのである。あげられた知見に意味がないと言いたいわけではない。しかしそれでは不十分だと言いたいのである。

すなわち、身体性にはらまれた潜勢力が言語への生成のうちで賦活せずに温存した力能を記銘しなくてはならない。（このような認識は<生成>の問いの賜物でしかない。）それが人間存在の問いにとって重要であるのは自明ではなかろうか。言語はなぜ可能であるかを知ることができたとしても、言語がなぜ不可能ではないか（不可能性の制約）を明るみに出す努力を払うべきである。さもなければ、言語の本態へもしたがってまた人間存在にも知的に肉薄する見込みなど期待してはいけないのではなかろうか。

1） 菅野（2004）、pp.152-165.
2） 所作がすでに表情であり、表情とはいつも身体動作である。こうした事実に言い方の冗長さが由来している。
3） Saussure (1968) , p.102. (ソシュール (1972) 、p.100.)
4） ここで示唆された二通りの<意味すること>は、グライスによって<自然的意味>と<非自然的意味>の違いとして解釈されたものと同じである。Grice (1988), pp. 213-223. (グライス（1998）、第六章として所収。)
5） 「間投詞」（interjections）に関するソシュールの主張に対して、ソシュール学派にさえ批判する論者が少なくはないという。『講義』の注釈者マウロによれば、①間投詞はたしかに慣習的なものだが、ソシュールの言うところに反して有縁性をもつ（motivé）、②間投詞は言語の体系性によって制約されない、という批判がある。『講義』の exclamations という用語がご覧のとおりこの注で

は他のものに置き換えられている。この点は理論的観点から見ると到底見過ごすことができない。Saussure (1972), p. 447.このやり方は、前注で指摘したように、二つの意味を類的に分離するだけではなく、分離の原理を<意味する意図>に求めることによって、両者のつながりを永久に不明なまま放置する結果を招くことになった。<自然的意味>の批判的考察として、菅野（1999b）を参照。

6） もちろんこの言い方は誇張法にすぎない。聴覚という感覚様相を離れて成立している<手話>は単なるジェスチャーではなくて歴とした言語である。われわれの議論は、必要ナ変更ヲ施スナラ（mutantis mutandis）手話にもほぼそのままあてはまるに相違ない。理論構成の問題として言えば、音声言語の理論と手話の理論とは少なくとも外延的同型の関係におかれるはずであろう。

7） 発達心理学者グレゴワールの息子が最初の言葉を口にしたのは、家の前を通過する汽車を指さしながらであった。それは、いくつかのもの（汽車、通過によって惹起された情動など）からなるただ一つの全体に割り当てられた特別誂えの語であった。それゆえこの語は、複数の意味次元をそなえる限りで、大人の<単語>とは異なる<一語文>（mot-phrase）だと言わなくてはならない。Merleau-Ponty (1988) , p.18. （メルロ=ポンティ（1993）、pp.18-19.）

8） われわれは言語的概念化が概念化のすべてをおおうとは考えないし、<言葉にならぬ思考>の積極的な可能性を信じている。幼児が言語を獲得するはるか以前から環境とのかかわりで単なる反射運動とは異質な知的行動をなしうることを疑えるだろうか。とはいえ、非言語的概念化と言語的概念化の異同とは精確にいってどのようなものか、あるいは両者はどのように関係するのか――これらの問題について主題的に論及する必要がある。レヴィンソンは概念思考の媒体と言語的媒体の区別に立って、非言語的思考と言語的カテゴリーを区別することを論じている。Levinson (1997) , pp.13-45.

9） われわれはこの論点を機会あるごとに指摘してきた。例えば、菅野（1995a）を参照。

10）「記号主義」は、グッドマンの形而上学を特徴づけるためにわれわれが翻訳のタイトルとして遣った用語である（グッドマン/エルギン（2001）を参照）。しかし用語そのものはわれわれの創案ではない。これは初めパース哲学の呼び名として遣われたもので（上山編（1968）、119 頁）、後にパース研究者の米盛氏がこの呼称を取り上げることになる（米盛（1981）参照）。

11）広義の「推論」とは、パースの用法である。彼は直接的で無媒介な認識という意味での<直観>を否定した。認識は記号過程であり、つねに推論が介在する。知覚もこの例に漏れない。推論性は<記号>とこう存在性格の規定要因である。

12）われわれは、知覚の記号過程と言語のそれとが互いに独立しており両者が逐次的に生起するかのように語らざるを得ない。しかし二つの過程は<言語音の生成>に関しては本質的に癒合しているだろう。過程の統合を明らかにする<生成

の言語>をふたたび試みなくてはならない。

13）この<典型>は熟慮のうえで構想されたわけでもないし、他の知覚項との比較を通じて整えられたものでもない。知覚の主体は構成されたカテゴリーが自ずと尺度としての権能をもつことを疑うことなく受け止めているにすぎない。経験的カテゴリーには認知心理学（ロッシェ）が明らかにしたようにプロトタイプ性がそなわる。これは経験の積み重ねがもたらす効果であろう。しかしこの点で、初発の言語的カテゴリーにはプロトタイプ性の構造が明らかではない。第一回目のトークンとしての<言語音>については、それが可能にするカテゴリーに内的多様性が認められない。（そのかぎりでそれは数学的カテゴリーに似ている。）この種の同質的カテゴリーが大人のふつうに使用している内的異質性をそなえたカテゴリーへとどのように変容していくか、それは発達心理学などの分野で探究されるべき問題であろう。

14）Goodman (1976), pp.52-57.

15）<引き込み>とは「生体リズムの同調化」のことである。多くの研究例のうち一例のみをあげる。小林ほか（1983）, pp.1883-1896.　心理学では身体運動の<共鳴>もしくは<共鳴動作>に関する観察が積み重ねられてきた。ここでは文献から興味深い一例を引くだけにとどめる。「生後四ヶ月の赤ん坊の前で観察者が掌をゆっくり開いたり閉じたりした。赤ん坊はじっと手の動きに見入り、その動きにあわせて（自分の手を見ることなしに）指を開いたり閉めたりした。」村田（1977）、pp.80-82. <共鳴>は模倣行動の一種であるがもちろんそれは意図に出た（volitional）行動ではない。この点については後述する。

16）言語音の作製に関する「音源フィルター理論」によれば、<音源は声帯の振動にあり、声道は音響的な管として機能し、その形や長さに応じて異なる方法で、その音源の音にフィルターをかける>。すなわち身体は<管楽器>にほかならない。ミラー（1997）、第 4 章を参照。

17）この<自己>は知覚=運動系が描き出す機能連関の帰趨中心であって、機能の支点としての意識の自己ではない。言い換えるなら、①これは身体性の自己であって意識の自己ではないし、②実体でないのはもとより何か積極的存在性でもなく、記号系の働きが収斂するある種の虚焦点である。<身体性の自己>については、Merleau-Ponty (1945) を参照。

18）ミヤマシトド（アラスカや西カナダに広く生息する小鳥）の歌の学習においても、<聴覚のフィードバック>が欠けると健常な歌をうたうことができないという。しかしなぜ歌えないのかという問いに生理学者は答えていないが、本来これは生理学で応じうる問いではないだろう。宮本（1995）、pp.88-89、を参照。

19）早期失明者（先天盲と幼児早期に失明した人）が描いた絵画作品の例を掲げる。

図１　そら色の目（光島貴之）

図２　ウルムの大聖堂(光島貴之)

図３　2 Birds (Eşref Armágan)

なお、我が国における作例については、障害者が営む藝術的創作を<エイブル・アート>という理念のもとに支援し推進している団体<エイブル・アート・ジャ

パン>が開催する展覧会などで触れることができる。もちろん視覚障害者の<絵画>や<写真>についての詳しい記号学的分析は依然として課題である。ここではただ<盲人は絵が描けないし絵を理解しない>という言明には反例があることの指摘にとどめる。早期失明者の絵画表現に関する認知心理学からの考察として、Kennedy (1993) を参照。本書の要約として、ケネディ（1997）、pp.104-112、を見よ。

20）視覚障害者の触覚が「視覚」と交錯するのと類比的に聴覚障害者の視覚は「聴覚」と交錯すると言えるかもしれない。この意味で、聾唖者が音声を色彩パターンに変換する「補聴器」を使用して音声言語を「話す」という事態を想像することが可能である。

21）Cavaillès (1994), p. 602.

22）記号の操作を<振る舞い>とカヴァイエスが呼ぶのは、この操作が恣意的なものではなく、その理論構造にとって内的でありかつある種の自発性が備えられているということ、そして何より、そこで実現される記号の操作が、その理論構造の可感的な表現であるという理解に基づいている。

23）例えば、群論や集合論、圏論が導かれた経緯にそのような事態を見出すことができる。これらはどれも、それ以前の数学の中で実際に行われていた操作を抽象化し、それを対象とするような具体的に独立した理論として形成された。

24）再帰的動きにおいて、世界の作り直しが含意されている限り、その動きは前進的である（だからといって「進歩的」だというわけではない。しかしそれは少なくとも非可逆であるし、同じ条件が二度現れることは原理的にありえない）。しかし、少なくとも数学における記号の再帰性には、前進的であるとは思われないような再帰性も存在する。すなわち、操作の領域が、操作に対して相対的に閉じている場合である。例えば、有理数の領域と剰余の操作を考えた場合、それらは操作とその結果に関して閉じている。すなわち、有理数に有理数をかけても、割っても、結果は有理数であり、その有理数に対して別の有理数をかけても割ってもやはり有理数である。あるいは置換群における置換操作を考えてもよいだろう。このように操作の結果と対象に関して閉じている場合も、記号はある意味で再帰的な動きをすることがわかる。しかし、そのときには作られる世界の全体はすでに見渡されている。カヴァイエスは、このような記号の空間を<結合空間>（espace combinatoire）と述語づけ、<主題化>の動きとは水準を分けている。Cf. Cavaillès (1994) , p. 101.

25）<十全化>とは、理論の内包が展開されることを意味しており、数学の歴史的な生成において、理論が主題化と理念化によって徐々に繰り広げられていくということである。

26）Cassou-Noguès (1998), p. 391.　同じことがそのまま知覚や藝術や哲学に対して

妥当するわけではない。「画家は先行の画家たちから自分の藝術を学ぶが、彼は世界を描くという先行の画家たちと同じ努力を、再び開始するのである」（Cassou-Noguès (1998) , p. 392）。したがって、「十全化」という言い方は、数学あるいは科学の歴史的な生成を、他の記号系の生成から区別する指標でもある。

27）実際カスー=ノゲス本人が、<ライプニッツのいう可能性>から彼自身の言う<可能性>を概念的に区別し、彼の言う<存在の可能性>（le possible de l'Être）を<自己への距離>（distance à soi）あるいは<開かれ>（overture）であるとしている。ここでいう<自己>も<意識主体>ではなく、むしろ存在の過去あるいは歴史性であると考えられている。*Ibid*, p. 391.

28）Cassou-Noguès (1998), p. 392.

29）ただし、この<連鎖性>いくつかのタイプに分類することができるように思われる。後で議論されることになるが、記号のイコン的振る舞いとインデックス的振る舞いとシンボル的振る舞いとでは、結び付けられる様態に違いがある。ここで議論されている連鎖性はとりわけシンボルにおけるものであり、記号と記号の間の連鎖性である。

30）Cavaillès (1994), p. 602. もっとも顕著な例は、デデキントの切断に見られるような代数的計算に対する数の領域の拡大において見出される。

31）<完備化>とはすでに見たように、ある操作の対象とその結果が、その領域内で閉じている、あるいは収まっているということを意味している。完備化と理念化とは分ち難く結びついているが、少なくとも完備化されるためには、理念化による転倒を経ることが不可避であるだろう。

32）Cassou-Noguès (1998), p. 393. [ ]内は引用者による補。

33）Cavaillès (1994), p. 520.

34）Cassou-Noguès (1998), p. 397.「観念性に意味を与える感性的な振る舞い（geste sensible）、われわれの見方からすれば、観念性に身体を与える数学的振る舞いは、観念性が数学において表現する感性的な構造（structure sensible）を、じかに生じさせる。われわれにとって観念性の身体であるものは、それが結び付けられる感性的な構造とのみ見分けのつかないものでありうる」。

35）忘却によってわれわれは言語的認識の切断を経験することができる。認識論的切断の研究は、フランスの科学認識論が長年行ってきたことである。フーコーの研究はこの切断をもっとも明確に理解させてくれる。Cf. Foucault (1969).

36）ロイ・ハリスは、従来の言語探究が踏まえる<分離主義>が理論として誤りであることの論証を通じて新たに言語への<統合主義的アプローチ>を提唱している。ここで言及する<統合>は字義的な意味ではロイ・ハリスの言う<統合>にそのまま重なるものではない。彼が言語音にかんして統合的アプローチを主張していないのは、その立場の不徹底を示すものではなかろうか。統合主義的ア

プローチについては、Harris (1998) を参照。

37）Poyatos (1993)

38）例えば間接言語行為やレトリックなどの言語現象は、<論理形式>の古めかしい観念を更新するよう強く求めている。そうした趨勢に棹差すものとして、認知言語学ないし認知意味論の言語探究を参照されたい。菅野（2003)、はこのような動向に学びつつレトリックの主題に即して意味や真理の問題を考察している。ここで立ち入れないが、問題の核心は、古めかしい<論理形式>の概念を<図式>の概念によって更新することにある。同じ主意から<プロソディー研究>（ファースを中心とするロンドン学派の業績）も再検討する必要があるとおもえる。プロソディーが統語論的現象に効果を生じるという例を一つだけあげておく。英語の複数形態素は、/-s/,/ -z/, /-iz/という異形態（allomorph）をもつと分析するよりも、語末の歯擦音性（assibilation）というプロソディーと見なしこれを単純に〔-s〕と記述できるのである。今井編（1983)、pp.389-403 を参照。

39）自発性としての擬態については、菅野（2004)、p.162 を参照。心理学からのアプローチとして、竹内（1983)、 pp.1961-1965 を参照。

40）メルロ=ポンティは心理学者ギヨームに依拠しながら、<模倣>の反表象主義的概念を提示している。Merleau-Ponty (1988) , pp,30-34.（メルロ=ポンティ（1993)、pp.38-44.）

41）この論点について前著でやや立ち入って述べた。菅野（1999c)、pp.85-89 を参照。一般に行なわれているパース解釈とは異なり、次のような表現をテクストに読むことができる。例えばパースは指標に言及しながら、「インデックスは特殊なものであるが、やはりある種のアイコンを含んでいる」と明言しているし（2.247）――引用数字は著作集の巻数と節の番号を表す。Hartshorne and P. Weiss (eds.) (1988). ――「シンボルは特殊なある種のインデックスを含むであろう」（2.249）とも言っている。またインデックスに関してパースはこうも言う。「不可能とはいわないが、完全に純粋なインデックス、逆にインデックス性の完全に欠如した記号を見出すことは容易ではないだろう」（2.306）と。ようやく彼が見出した「純粋なインデックス」は、言語的なもの――指示代名詞と関係代名詞――であった（3.361)。なぜならそれらの言語要素は、単にモノを指示するだけで記述は何もしないからである。――それにしても、なぜ二例の例外しか純粋性を保ち得ないか、その理由が明らかではない。

42）このことは語彙のなかにはオノマトペに起源をもつものがあることを否定するものではない。ソシュールはオノマトペについての曖昧な考察に基づきオノマトペ起源の語彙の可能性を斥けているが、その議論には妥当性がない。Saussure (1968) , pp.101-102.（ソシュール(1972)、pp.99-100.）

43）音象徴についての比較的最近の文献として、Hinton, Nichols, and Ohala (eds.) (1994) がある。なお sound symbolism の訳語として<音象徴>が適切であるとは必ずしもおもえない。辞書によると、<象徴>という語はもと中江兆民『維氏美学』（1883 年刊）で symbole の訳語として用いられたのが嚆矢だという。フランス象徴主義との関連で遣われた用語だろう。この語の意味は現在の<象徴>という語の内容に直結している。しかし sound symbolism と熟すときの symbolism はむしろ語源であるギリシア語の symbolon（字義的には<割符>、後に<記号>）に結びつく。つまり<記号の働き>すなわち<意味の働き>のことである。<音象徴>はさしあたり言語音の存在論にかかわるカテゴリーであるが、その神経学的基礎として<共感覚>（synesthesia）あるいはそれに類似の神経機構を想定できるかもしれない。ちなみに<共感覚>とは、ある感覚刺激によってそれとは異なる感覚様相の知覚が不随意的に惹き起こされる現象である。＜共感覚>については、シトーウィック（2002）を参照。

44）この概念の系譜に連なる先行研究として、ユクスキュルの<環世界論＞（Umweltforschung)、ハイデッガーの＜現存在分析＞（Daseinanalyse)、メルロ=ポンティの知覚的世界 (le monde perçu) の現象学的記述、さらにギブソンの生態学的心理学、あるいはスペルベルたちの<有意性理論>(relevance theory)などをあげることができる。

45）菅野（1995b）ならびに菅野（1995c）を参照。

46）ソシュールの言語思想における<恣意性の原理>はもはや<原理>の体面を失っている。菅野(1999a)を参照。

47）この定義では、伝統的に<換喩>とは区別されてきた<提喩>（synecdoche）も差別なく<換喩>に含められることになる。菅野（2003b）を参照されたい。

48）パースによる<シンボル>の定義は各種各様であるが<習慣>（habit）ないし<慣習>（convention）とのかかわりで定義を試みた節（CP, 8.335）を引用しておく。「私は<シンボル>をそれの力動的対象によって――そのように記号が解釈されるだろうという意味においてのみ――規定された記号と定義する。それゆえ<シンボル>は慣習や習慣、あるいはそれの解釈項ないし解釈項の場（そこで解釈項が決定されるような場）の自然な性向である」。

49）メルロ=ポンティにとって、習慣の獲得とは運動的意味の運動的把握である。すなわち、<習慣>の問題とはカテゴリー把握（categorization）のそれなのである。またわざわざ「運動的」という修飾語が遣われたのは、カテゴリー把握が古典的主知主義の<悟性>の働きや<表象>の働きではなく、身体性の働きによることを強調したいためである。Merleau-Ponty (1945), pp.166-172, pp. 177-179（メルロ=ポンティ（1967-1974)、pp.239-246、pp.253-255）を参照。

50）<グッドマンのパラドックス>とその意義については次の箇所が巧みに語って

いる。Goodman and Elgin (1988), pp.12-19. (グッドマン/エルギン（2001）、pp.17-28.)

引用文献

[1] Cassou-Noguès, P.(1998), 'Le problème des mathématiques' , dans *Merleau-Ponty, Notes de cours sur l'origine de la géométrie de Husserl :sous la direction de Renaud Barbaras, suivi de recherches sur la phénoménologie de Merleau-Ponty*, P.U.F..

[2] Cavaillès, J.(1994), *Œuvres complètes de philosophie des science*, Hermann.

[3] シトーウィック、R.（2002）『共感覚者の驚くべき日常』（山下篤子訳）草思社.

[4] Foucault, M.(1969), *L'archéologie du savoir*, Éditions Gllimard.

[5] Goodman, N.(1976), *Languages of Art*, 2nd ed., Hackett Publishing Company.

[6] Goodman, N. and Elgin, C. Z.(1988), *Reconceptions in Philosophy and Other Arts and Sciences*.(グッドマン/エルギン（2001）『記号主義』（菅野盾樹訳）みすず書房.

[7] Grice, P. (1988), 'Meaning,' in Grice, P. *Studies in the Way of Words*, Harvard University Press.（グライス、P.（1998）「意味」、グライス、P.『論理と会話』（清塚邦彦訳）勁草書房.）

[8] Harris, R. (1998), *Introduction to Integrational Linguistics*, Pergamon.

[9] Hartshorne and Weiss(eds.)(1988), *Collected Papers of C. S. Peirce*, Thoemmes Press.

[10] Hinton, Nichols, and Ohala（eds.)(1994), *Sound symbolism*, Cambridge University Press.

[11] 今井邦彦編(1983)「プロソディー分析――ロンドン学派」、松浪有ほか編『大修館英語学事典』大修館書店.

[12] Kennedy, J.M. (1993), *Drawing and the Blind*, Yale University Press.

[13] ケネディ、J. M.（1997）「盲人はどのような絵を描くか」『日経サイエンス』4 月号

[14] 小林登ほか（1983）「周生期の母子間コミュニケーションにおけるエントレインメントとその母子相互作用としての意義」『周産期医学』vol. 13, no.12.

[15] Levinson, S. C.(1997), 'From outer to inner space: linguistic categories and non-linguistic thinking,' in Nuyts and Pederson, (eds.), *Language and Conceptualization*, Cambridge University Press.

[16] Merleau-Ponty, M.(1945), *Phénoménologie de la perception*, Gallimard.（メルロ=ポンティ、M.（1967-1974）『知覚の現象学』みすず書房）

[17] Merleau-Ponty, M.(1988), 'La conscience et l'acquisition du langage,' dans Merleau-Ponty, *Melreau-Ponty à la Sorbonne*, Cynara. (メルロ=ポンティ、M.（1993）『意識と言語の獲得』（木田元・鯨岡峻訳）みすず書房.)

[18] ミラー、G. A.（1997）『ことばの科学: 単語の形成と機能 』（無藤隆・青木多

寿子・柏崎秀子訳）東京化学同人.
[19] 宮本健作（1995）『声を作る・声を見る』森北出版.
[20] 村田孝次（1977）『言語発達の心理学』培風館.
[21] Poyatos, F.(1993), *Paralanguage*, John Benjamins Publishing Company.
[22] Saussure, F. de (1968), *Cours de linguistique générale*, Payot, p.102. (ソシュール、F. de(1972)『一般言語学講義』（小林英夫訳）岩波書店、p.100.)
[23] Sausseure. F. de (1972), *Cours de linguistique générale, Édition critique préparée par Tullio de Mauro*, Payot.
[24] 菅野盾樹（1995a）「人間はいかにして<外部>と交感しうるか」、菅野盾樹『いのちの遠近法』新曜社.
[25] 菅野盾樹（1995b）「知のコスモロジー」、菅野盾樹『いのちの遠近法』新曜社.
[26] 菅野盾樹（1995c）「人間はどのように<世界制作>を営むか」、菅野盾樹『いのちの遠近法』新曜社.
[27] 菅野盾樹（1999a）「恣意性の神話」、菅野盾樹（1999）『恣意性の神話』勁草書房、第一章.
[28] 菅野盾樹（1999b）「「自然的記号」という誤謬」、菅野盾樹『恣意性の神話』勁草書房、第二章.
[29] 菅野盾樹（1999c）『恣意性の神話』勁草書房.
[30] 菅野盾樹（2003）「原初の比喩としての<換喩>」、菅野盾樹『新修辞学』世織書房、第四章.
[31] 菅野盾樹（2004）「指さしの記号機能はどのように発生するか――あるいは、<ゆうちゃんの神話>」『現代思想』青土社、7 月号.
[32] 竹内徹（1983）「新生児の模倣能力」『周産期医学』vol.13, no.12.
[33] 上山春平編（1968）『パース・ジェイムズ・デューイ』中央公論社.
[34] 米盛裕二（1981）『パースの記号学』勁草書房.

La génération fonctionelle du son linguistique
_ou bien d'assister à la déhiscence du mot premier

Tateki SUGENO, Kazunori Kondo

Comment est-ce que *le son linguistique* est venu au monde ? Ce n'est pas la même question que le champ linguistique demande souvent, la question empirique, « Comment le langage a-t-il été aquis ? », mais plutôt c'est par la question métaphysique-logigue que nous demandons quelle structure logique l'exsistence du son linguistique possède, et encore par quelles étapes cette structure a été construite.

La science du langage ou la linguistique jusqu'ici n'a pas eu la question de *la génération*. Elle n'intérroge en détail que chaque part divisée du langage unifié. Elle essaye de traiter du système linguistique *ex post fact* en tant qu' aspect parfait dans lequel le langage accomplit sa génération. Ainsi le *mouvement récursif* du signe qui provoque la génération de tous les systèmes du signe est obligé d'échapper à l'attention ou d'être négligé. Les thémes que notre argument implique sont les suivants :

1. Le corps resonant : *La résonance* qui est a priori du corps est une des conditions du *son linguistique*.
2. L'a priori de l'écoute de soi. La caractéristique du mouvement que l'être humain exerce à créer la sonorité est que la sonorité crée s'entend par l'existence qui l'émet.
3. L'objet et la sonorité crée à celui-ci partagent le même attribut. Autrement dit, le corps résonne avec l'objet.
4. La sonorité qui s'entend et se répète est déjà *le son linguistique* .
5. Quant au gêste corporel, la création du *son linguistique* est l'imitation. Parce que par l'imitation l'attitude se répète.
6. Le son linguistique est regardé comme *icon* quant au type du signe (C. S. Pierce).
7. Du point de vue rhétorique, cette sorte du *son linguistique* est métonymique ; par exemple, celui qui catégorise le *pigeon* comme #piopio#. Sa voix est un des attributs du pigeon ; c'est la stratégie prise ici qui signifie la totalité du pigeon par un attribution comme une partie du pigeon.
8. La structure de la métonymie fournit la fonction de l'*index* au signe. Le fondement de la fonction dans ce cas consiste en *causalité*.
9. Le mouvement recursif que crée une sonorité transforme la sonore en *son linguistique* .
10. Le son premier linguistique est un *échantillon (sample)* ; c'est-à-dire que *la possession d'attribut* et *la désignation au label* s'intégrent dans cette sorte du signe (N. Goodman) , et celle-ci équipe une fonction du signe, *exemplification*.

11. La catégorie émerge en même temps qu' une sonorité se transforme en son premier linguistique. *L'émergence de la catégorie* équivaut à *la désignation au label*.
12. Nous démontrons la génération du son linguistique, en la généralisant du point de vue du devenir matématique (J. Cavaillès). *L'idéalisation* et *la thématisation* qui font la mathématique devenir sont le principe constructif du signe qui se fonde sur le corps, bien qu'elles soient de niveau plus abstrait.
13. Le fondement sémioticiste de la catégorie que la génération du son linguistique produit est *convention* (C. S. Pierce). Dans le sémioticisme, *la convention* correspond approximativement aux catégories transcendantales dans la philosophie kantienne. Le son linguistique devient *symbole*, la convention lui donnant la réguralité.